



シモマツチの 校長随想

～教育は過去からの贈り物、そして未来へのメッセージ～

下町壽男 盛岡中央高校附属中学校副校長

第26回

「支援」から「対等」へ

数年前、国際理解に関するあるスピーチコンテストに、審査員の一人として出席しました。審議の間、参加生徒のワークシoppが行われていました。私は、審議後に少しだけ覗きに行ったのですが、そのとき講師が話されていたある言葉に心が動かされました。それは、開発途上国の人々が望んでいるのは、「支援される」ことではなく「対等であること」というものでした。私はこの言葉を聞いて、二つのことが頭によぎりました。

□ 何が望まれているのか

一つは、バングラデシュで起業された山口絵理子さんのことです。彼女は途上国を旅する中で、そこで行われている「現地生産」に疑問を抱きます。それは、素材や設備などは自国外から調達し、労働力だけを現地の人で賄うというやり方です。それに対して彼女は、ネクストチャイナを目指すことより、自国の良さを活かすことこそが、グローバル市場に打って出る武器になるはずと看破します。

そして、「途上国から世界に通用するブランドをつくる」というコンセプトの下、現地の素材、現地の職人、現地の人のマネジメントによるマザーハウスという会社を立ち上げ、今や世界が注目するグローバル企業に発展させています。

現地の人を単なる安価な労働力としてしか見なさないような枠組みを打破し、彼らを経営の中心に据えていくという彼女の経営哲学は、まさに「支援」から「対等」へ向かうグローバルリテラシーであると私は感じました。

二つ目は、東日本大震災の復興に関するものでした。震災直後、被災地の住民は「支援される」存在でした。しかし、復興が長期化する中で浮かび上がったことは、支援される側であった被災地の住民が「受動」から「主体」として立ち上がっていくことこそが、復興を持続可能にしていくということでした。

その地域にいる人間が、取り組みを「自分ごと」にしていくこと。つまり、自ら新しい価値を創りだし、地域の中で雇用を生

み出すこと、そして、支援する側との対等な力関係によって復興が進められるということです。

私は、「3・11」の半年後、ある被災地の仮設で暮らす方とお話しする機会がありました。彼は開口一番『「食糧は三日やったらやめられない」という言葉を知っているか」と私に問いかけました。彼が言いたかったのは、補助金や食料や物品が与えられることで、人は働こうとしなくなるということでした。彼の嘆きの言葉が今でも私の記憶に残っています。

また、私は同じ頃、宮古市田老町のある会場で行われたあるシンポジウムに参加しました。田老町では、958隻の漁船のうち881隻が流出、621台のワカメ・昆布の施設が全滅、鮭の孵化場などの施設も全滅した地域です。このシンポジウムの中で漁協のある方がこんな話をしました。「もうこれで漁業は終わりだと思った。しかし、漁業を復興しないと地域も復興しないという思いで取り組んできた。そのために、ウニではなく、ワカメ・昆布の養殖

からスタートした。なぜなら、ウニはそれを使った人は潤うけれど、それが周囲の幸に波及しない。ワカメ・昆布は、加工や販売など漁業者以外の多数の雇用も生み出すからだ」

□ 学習パラダイムの転換

さて、ここで私は、学校教育における学びの問題についても同様の構造があることに否応なく気づかされます。それは、生徒が、教師から知識を一方的に与えられ、それをひたすら受動するという存在から、教師と学習者が向上心を共にする同志として互いに学びあう、という対等の関係に進んでいくということです。これが「教授パラダイム」から「学習パラダイム」へと向かうフェーズの転換です。

「学習パラダイム」への転換が叫ばれる昨今、私たちは専ら、教師の立ち位置にポジショニングして解決を図ろうとしているのではないのでしょうか。例えばアクティブ・ラーニングといったとき、様々な授業手法や、「教師が」どのようにして生徒を深

い学びに導く問いを立てられるか、などにフォーカスされがちです。でもそこには、「教師とは生徒に知識を授ける者」という目線が感じられるのです。

私たちは、そろそろ学習者の側にポジショニングしていく必要があるのではないかと。そして、学習者が、一方的に知識を受動することへの問題意識を持ち、「自分ごと」として学びを考え始めるとき、本当の学習パラダイムへの転換が起きるのではないかと。そういう意味で、学習パラダイムへの転換とは、学習者の意識改革であり、彼らが「支援される」者から「対等である」ことに向かう独立運動なのかもしれない。

もちろん、その意識変革は、教師が学習者に植え付けて発動されるものではなく、教師や学校という、学習者をとりまく「環境」そのものが、実は彼らのその芽をつぶす存在かもしれないことに気づくことが最初の一步なのかもしれないと思います。